

甲子園野球の実態を通して見る朝日新聞社説の論調

The analysis of Asahi newspaper editorial about high school baseball

1K05B146

指導教員 主査 リートンプソン先生

出崎 洋太

副査 宮内孝知先生

本論では、夏の全国高校野球選手権大会に注目し、その新聞報道を研究対象としている。朝日新聞の社説では 1993 年以降、甲子園野球の現状からの脱却と変革を目指すものが目立つようになっており、とくに 1993 年間から 1997 年までの 5 年間は、社説タイトルに 4 度「変わる」というフレーズが使用され、唯一使用されなかった 1996 年社説も、内容においては現状からの脱却を提案するものであった。しかし実際行われている甲子園野球の実態はほとんど変わっていないように思われる。

両者の間には矛盾が生じているのではないか。もし矛盾があるとすれば、その矛盾はなぜ未だに存在し続けているのだろうか。それを知るには、大会をけん引してきた朝日新聞の社説において、甲子園野球や高校球児にとって何を良いものとし、何を悪しきものとしてきたのか、その詳細を知る必要がある。戦後の社説記事を中心に内容の分析を行いながら、具体的な試合報道の記事も分析し、検討した。

まずは社説記事で何を正しいものとし何を悪しきものとしているのか、その変遷を辿り、朝日新聞社が甲子園野球をどうあるべきものとしているのかを明らかにした。一貫して変容しないのが「ひたむきさ」の強調と「勝利至上主義の否定」である。「ひたむきさ」は甲子園に関わる内容の社説の総数の約 43%において、それが強調される文章や単語が登場している。また「勝利至上主義の否定」は、戦前の大会から言われ続けていることだ。甲子園野球が最も重要だとしている価値観と言ってよい。選手には常に「立派に負ける」ことや

「正しく勝つこと」が求められている。そして勝利至上主義の否定は、ガンバリズムの強要も引き起こしている。逆に変容してしまったのが「連帯」の精神である。70—80 年代にはこの精神を強調する記事もあったが、90 年代以降減少し、2000 年代にははっきりと否定されている。さらには、世論調査の結果とも比較し、「甲子園野球の魅力」や「問題点」といった項目と照らし合わせた。これにより社説記事が世論にどの程度有効に働いているかも検証することが出来た。

次に社説以外における報道記事の分析を行うため、具体的な大会の報道分析を行った。対象としたのは第 80・82・88・90 回全国高校野球選手権大会である。各大会の特に注目された試合において(例えば第 80 回大会の準々決勝で横浜高校松坂が延長 17 回を 1 人で投げ切ったケース、第 88 回大会の決勝・決勝再試合において早稲田実業高校・駒大苫小牧高校両チームのエース斉藤と田中が連投したケースなど)、記事としてどのようなものが掲載されているのか。それらの内容の検証を通し、球児たちが依然として体の酷使をさせられている実態や、報道記事によってその実態を巧妙に隠すロジックが浮かび上がった。

朝日新聞社が社説で主張し続ける理想とは異なり、実際の甲子園野球には体の酷使をして勝利を追及する実態があり、矛盾は存在する。だが逆に、体を酷使せず、勝利を追及しない甲子園野球とは存在し得ない。野球というスポーツが「勝つ」ことで終了するゲームであり、夏の全国高校野球選手権大会がトーナメントという「勝ち進むこと」を強制するシステムである以上、どんなに建前

で批判しようとも、勝利の追求は避けることが出来ないからだ。つまり、甲子園野球が甲子園野球として存在するためには、体の酷使による勝利の追及は欠かすことが出来ない。

とはいえ高校生に「体を酷使して勝ちあがれ」と公然と言うことは、社会通念上不可能だ。そこ

で必要となるのが、社説での理想論である。長きに渡り社説内で「ひたむきさ」と「勝利至上主義の否定」が語られてきたのは、勝利を追い求める実態を世論からカムフラージュするためと言ってよい。この理想があるからこそ甲子園野球は今の地位を築くことが出来たのだ。